

## 開催報告

## FDワークショップ Blackboard活用講座

## 初級編 —初めてのBlackboard—

[2016年12月13日]

授業支援システムBlackboardの周知と活用推進を目的として、当センター・メディアセンター主催のワークショップを池袋キャンパスで開催しました。初級編ではメディアセンターの小川龍秀氏より、授業支援システムCHORUSのサポート終了など、Blackboard移行の経緯や、Blackboardの機能について基礎的な説明があり、その後、ログイン方法から画面の解説、教材や課題の提示方法までを実際に体験する活動を行いました。昼休みという短時間のワークショップでしたが、29名が参加し、多くの参加者から「体験型のワークショップだったので理解を深めることができた」など、実際に自分が操作することでBlackboardの使用方法を理解できたという感想が寄せられました。また、参加者アンケートでは、「今回のFDで知りたかったことがカバーされていて助かりました」「システム移行への不安が小さくなりました」など、CHORUSからBlackboardへの移行に向けて不安を取り除くことができたという声も多数いただきました。



ワークショップ当日の様子

## 中級編 —便利に使おうBlackboard—

[2017年1月18日]



中島俊克教授

初級編に引き続き、授業に合わせたBlackboardの使用方法や、便利な使い方の紹介を目的として、中級編のワークショップを池袋キャンパスで開催しました。まず、TL部会センター員である文学部の阿部善彦准教授から、少人数の演習科目で効率的に課題提出・採点を行う方法について説明があり、次に経済学部の中島俊克教授から、大人数の講義における出席管理・教材配布・掲示板利用・課題提出の方法について説明がありました。ご自身の体験談を交えながら具体的な操作方法をご説明くださり、Blackboardの発展的な使い方について理解を共有することができました。中級編のワークショップも昼休みの開催でしたが、21名が参加し、活発な質疑応答が行われました。参加者のアンケートでは、「先生方に実際の具体例を見せて頂けたことで、大変参考になりました」などの感想が寄せられ、「今回のように使用例を色々ご提示いただきたい」など、科目担当者からみた効果的なBlackboardの使い方について、様々な事例を共有したいという声も多くいただきました。

## メディアセンターより 「2017年度中にBlackboardへ移行してください!」

授業支援システムCHORUSのサポートは2016年度で終了し、2017年度末には授業利用も終了いたします。

**現在CHORUSをご利用の方は、2017年度中にBlackboardへの移行をお願いいたします。**

CHORUSからの移行やBlackboardに関するご質問等は、メディアセンターヘルプデスクまでお問合せください。

[メディアセンターヘルプデスク] <http://s.rikkyo.ac.jp/helpdesk> (03-3985-2905)

[教員用Blackboardトップページ] <http://s.rikkyo.ac.jp/bbteachers>

※Blackboardのマニュアルや、FDワークショップの動画を掲載しています(閲覧にはV-CampusIDとパスワードが必要です)。



# Rikkyo Education

Rikkyo Educationは、立教大学で行われている授業実践や教育上の取り組みなどを紹介するコーナーです。第6回となる今号では、当センターで開発した「プレゼンテーション・ルーブリック」に焦点を当て、実際に授業でルーブリックを使用された先生方の取り組みを紹介しながら、具体的な指導や工夫のポイントについて紹介します。演習科目での活用例について異文化コミュニケーション学部の師岡淳也准教授に、講義科目での活用例について観光学部の豊田三佳教授にお話を伺いました。

## コミュニケーションツールとしてのルーブリック

異文化コミュニケーション学部  
准教授 師岡 淳也

### 「基礎演習」の位置づけ

Q:「基礎演習B」とはどのような科目ですか？

師岡: 異文化コミュニケーション学部では、初年次の必修科目として「基礎演習A」(春学期)、「基礎演習B」(秋学期)を展開しており、1クラス20名程度で運営しています。「基礎演習A」は、情報受信・発信能力など大学での学びの基礎となるスキルを身につけ、他者と共に調べ、話し合うことにより、学びの対象や他者への理解を深めることを目的としています。「基礎演習B」では、春学期で身につけた力をさらに磨き、議論、発表、レポートなど、大学の学びにおいて適切な形で情報発信する方法を身につけることを目指しています。また、「基礎演習A・B」では、異文化コミュニケーション学部に関連する様々なトピックに触れることで、学生一人ひとりが自らの興味関心や学部での学びの目的をより深く考える機会を提供するようにしています。

「基礎演習B」では、学期の終盤に4~5名程度のグループで口頭発表を行う課題が課されますが、私の担当するクラスでは、プレゼンテーションの準備のポイントを説明する際、そして自分たちで発表前に準備状況を確認するためのツールとして「プレゼンテーション・ルーブリック」を使用しました。

### プレゼンテーションを指導する重要性

Q:ルーブリックを用いることになった経緯と目的を教えてください。

師岡: これまで、異文化コミュニケーション学部では、基礎演習A・Bを通してレポート、ディスカッション、プレゼンテーションを中心としたアカデミック基礎力を伸ばそうとしてきました。ただ、これまでどちらかといえばレポートとディスカッションの指導に重きがお



師岡 淳也  
異文化コミュニケーション学部准教授

かれ、プレゼンは実践を通してやり方を学んでいけるだろうという意識が担当教員の間であったように思います。ですから、レポートでは「ここまでやろうね」という最終的なレベルを示した上で、段階を追ってレベルアップしていく積み重ね式の指導ができていたのですが、プレゼンではそれを達成できていませんでした。しかし、学生からみると、何をどうすれば良いかについての指導がなければ、教員の考える

「良いプレゼン」の基準や評価の仕方が分からないわけです。そこで、クラス間で授業内容と評価の公平性を担保しながら、学生のプレゼンの向上を目指して、ルーブリックを活用しようと考えました。

### 「ゆるやかな指針」としての共有

Q:ルーブリックについて教員間ではどのように理解が共有されたのでしょうか？

師岡: 今年度については、プレゼンを評価する上での「ゆるやかな指針」としてルーブリックを担当者間で共有しました。

ルーブリックに限らず、クラス間で共通の基準なり指針なりを採用する際には、当然ですが授業担当者の理解を得ることが必要です。論文の書き方や発表の仕方は専門によって異なりますから、「これを基準にします」という厳密な評価基準を設けることは難しいと思っています。ですから、ルーブリックを用いた評価の提案はしましたが、それはあくまで「ゆるやかな指針」としての提案であり、絶対的な評価基準として用いた訳ではありません。

## Q:「ゆるやかな指針」について詳しく教えてくださいか?

師岡: ルーブリックの各項目を評価の際の参照項目として位置づけ、具体的にどの項目をどれだけ重視して評価をするかは、各担当者の裁量に委ねるといことです。例えば、課題によっては発表の際にレジュメの配布を求めないこともありますし、パワーポイントを使わなくても「良いプレゼン」はできますよね。ですから、レジュメありき、パワーポイントありきとなっている現在のルーブリックをそのままの形で評価基準として使うことはできません。そもそも「良いプレゼン」とは何かに関して統一の基準を設けることすら難しいわけですから、ルーブリックを絶対的な評価基準として領域横断的に使うのは現実的ではありません。その一方で、ここが重要だと思うのですが、どんなプレゼンにも共通して重要な点はあります。例えば、聴き手に合わせて発表の内容や仕方を考えることはどの学問領域でも必要なプレゼンのスキルです。そうした良いプレゼンの要素を教員同士あるいは教員と学生の間で共有できるのが、ルーブリックの利点ではないでしょうか。

基礎演習は統一シラバスを使って複数のクラスで授業が行われるので、各教員が納得できる公平な基準を採用し、それを学生に提示する必要があります。その際、ルーブリックのように基準が明示された資料を参考に、枠組みを共有することは非常に有効な方法だと思います。その意味で、ルーブリックは絶対的な評価基準というより、教員間で評価基準を話し合うための土台のような、コミュニケーションツールとしての役割が大きいと言えるかもしれません。

## 授業における効果

### Q:ルーブリックを使用することで、教員や学生にどのようなメリットがありましたか?

師岡: 今年度の経験から言えば、私のクラスでは達成目標や良いプレゼンの要素を学生に説明する際に役立ちました。ルーブリックを使うと、左側の「入門レベル」から右側の「卓越レベル」まで順を

追って、流れるように説明できます。また、ルーブリックは各レベルで必要とされる要件が列挙されているので、問題の多いプレゼン・一定の基準を満たしたプレゼン・優れたプレゼンの違いも明確に示すことができます。学生もルーブリックを用いることで、今自分がどのレベルで、次に何をすればレベルアップできるのかといったことを把握しやすくなると思います。

さらに、学生同士による相互評価を活性化させられるのもルーブリックを使うメリットの一つだと思います。基礎演習のクラスでは学生同士で相互評価をする機会を数多く設けていますが、最初からクラスメートのレポートやプレゼンを客観的に評価したり、批判的かつ建設的な講評ができる学生は多くありません。評価用紙を読むと、レポートやプレゼンに対する感想しか書かれていないことも結構あります。もちろん、レポートやプレゼンに対して適切なフィードバックをすることは教員にとっても難しいことですが、ルーブリックがあると、それを参考にしながら客観的な評価や建設的な批評もしやすくなるのではないかと考えています。批判的かつ建設的に他者と対話することは、非常に大切なアカデミック・スキルですので、そうしたスキルを指導する際のルーブリックの活用方法についても今後検討していきたいと思っています。

## ルーブリックを用いた今後の指導の展開

### Q:来年度に向けて、ルーブリックを使用する上での工夫や改善点がありますか?

師岡: 今年度は、プレゼンやレポート提出の前の週にルーブリックを配りました。その段階で、こういった基準があるよと具体的に示し、自分がどのレベルにいるかについて丸をつけさせて自己評価をさせたわけですが、しかし、自分の弱みや強みを把握して、それに合わせて授業を受けるためには、なるべく早く自己評価の機会を与える方が良いですね。実際に、学生のアンケートでは「もっと早い段階でルーブリックが欲しかった」という声が複数寄せられました。今後は、学生がプレゼンやレポート作成能力の向上を長期的な視点で実感できるように、また教員が学生の自己評価を踏まえて指導できるように、早い時期にルーブリックを活用し始めたいと思います。

## 「講義型」の授業で能動的な学びを育む

観光学部教授 豊田 三佳

### グループ・プレゼンテーション導入のきっかけ

#### Q:ルーブリックが使われた授業の特徴を教えてください。

豊田: 「アジア太平洋観光論」という、2年次以上を対象とした講義型の授業で用いました。履修者は60名です。この授業では持続可能

な観光開発をメインテーマとして、アジア太平洋地域の国々でどのような観光政策が展開されているのかを具体的な事例から学びます。また、学生がグループごとにケーススタディーを行い、分析した成果を



授業の様子

プレゼンする活動を取り入れています。

**Q：講義科目でプレゼンテーションを導入しようと思われたきっかけを教えてください。**

**豊田：**私はこれまでイギリスとシンガポールで教鞭をとってきました。これらの国では講義と並行して、少人数の演習(チュートリアル)が行われており、講義内容に関するディスカッションやプレゼンを通して、学生が能動的に授業に参加する構造ができていました。それに比べて日本の大学では、演習を伴う授業が少ない傾向にあると思います。講義型の授業であっても、もっと能動的に学生が知識を応用する機会を設けたいと考え、プレゼンを取り入れました。

## 指導のポイント

**Q：プレゼンテーションに向けた週ごとの指導のポイントについて教えてください。**

**豊田：**2016年度の秋学期を例に、説明したいと思います(表1)。

表1

週	活動(授業外の学習時間も含む)
1週目	●この授業の評価課題の一つはグループ発表であることを伝達し、グループ発表で扱いたい地域・国・テーマについて考え始めてもらう
2～3週目	●授業の中でクイズを出し、隣の受講者とディスカッションを通して考えるという学びの環境を形成していく
4週目	●グループ発表の課題について具体的に提示 ●学生は、各自が発表したい国を選んで、扱いたいテーマを考える
5週目	●国別の発表グループの顔合わせ ●学生間で班長を決め、発表の基本的な方向性やテーマを話し合う ●この週から、グループごとに座るように指導する ●授業時のクイズは、グループごとのより深いディスカッションを促す内容に発展させる
6週目	●講義と並行して、学生はグループ発表の準備を開始
7週目	●各グループの発表日を決定する ●ルーブリックを配布し、発表の評価基準の説明をする
8週目	●グループ発表の準備日
9週目～	<各週に4グループずつ発表を行う> ●発表担当以外の学生は、各グループの発表に対する評価を記述する(ピア・レビュー方式)
最終週	●学生は、自分たちの発表に対するピア・レビューを読み、グループで自分たちの発表の良かったところ、改善すべき点を話し合う

## 初回(1週目)

**豊田：**私は、初回の授業で「終盤にグループでプレゼンを行うこと」「学生の能動的な参加が求められる授業であること」を明確に説明し、履修者に授業で何が期待されているのかを理解してもらうことが大事であると考えています。ここで明確な見通しを持つことで、学生はグループ発表に取り組むことを意識しながら授業を受けるようになります。

## グループ分け(4～5週目)

**豊田：**発表のグループは原則として4名で構成しています。5、6名のグループ構成では、話し合いに積極的に参加しなかったり、他のメンバーに仕事を任せたりする学生も現れるようになります。経験上、授業時間外にも時間調整がしやすいのは4人以下だと考えています。また、知り合い同士ではなく、自分が発表したいと思う「国」ごとにグループを組ませています。「友人同士ではないが、関心のある国は共通している」という状況が適度な緊張感と責任感を生み、積極的な発表準備への取り組みにつながっていると感じます。

## 発表準備開始まで(1～5週目)

**豊田：**私の授業では、「持続可能な観光」をどのような視点、問題意識で捉えるかが重要なポイントとなります。そのために、講義ではテーマに沿って具体例をあげながら比較や分析の観点を示し、発表にあたって何を考えなければならないのか、どこに気を付けるべきかを明確に示すようにしています。また、ディスカッションでは学生がグループ内の人間関係を深めつつ発表の準備を進めていけるように、発表の準備となる活動を課題として提示し、指導しています。

## 発表準備期間(6～8週目)

**豊田：**プレゼンの課題を示すだけでなく、発表形式も具体的に指示しています。例えば、「発表時間は15分、配布資料のスライドは12枚」「最初のスライドはタイトルとメンバーの名前とし、最後のスライドは参考文献を入れること」「特定の社会・文化への理解を示す概要、問題の所在、分析の順でスライドを構成すること」などです。

「プレゼンテーション・ルーブリック」は、この段階で重要になります。発表する国の概要と課題設定がある程度見えてきて、その内容をどう伝えるかという具体的な発表の流れ



豊田 三佳  
観光学部教授

れを考える段階になってからルーブリックを渡しています。この時点で渡すことで、形式だけを重視するのではなく、内容もしっかりと詰めた発表が実現すると思っています。毎年、ルーブリックを渡して発表の構成を練るように促しますが、全てのグループがある一定の水準に達していることから、確実に効果があると実感しています。

## 相互評価(9週目～)

**豊田：**学生にはリアクションペーパーを1人5枚配布します。各週に4グループが発表するので、そのうち4枚にはそれぞれのグループの発表に対する評価を書かせています。評価の際は、ルーブリックを相互評価の基準として取り入れ、どういう理由で良かったのか(悪かったのか)、どうすれば次の水準に到達できるかを被評価者が把握できるように記述してもらいます。

残りの1枚は教員に提出するものです。持ち点の10点を4グループ

それぞれに割り振る(0~5点)という評価活動を行い、なぜそのグループの発表への配点が高いのか(あるいは低いのか)を説明したものを教員に提出します。評価者の視点をもって学生がお互いに評価を行うことは、発表の質を高める上でとても効果的で、どんどん発表内容が深まっていくのが見てとれます。良いと感じた方法を自分たちの発表に応用するからだと思えます。

この授業ではルーブリックを活用していますが、直接的にそれを成績評価に用いるのではなく、学生が相互に評価し合い、発表の質を高め合うためのツールとしてルーブリックを利用しています。

## 学生の反応

Q:学生の反応を教えてください。

豊田:異なる学年の学生でグループが構成されているため、発表に

不慣れな下級生は先輩から学びつつ準備を進め、結果的にある程度の質に達した発表を行っています。多くの学生は他のグループメンバーに迷惑をかけてはいけないという意識も働くようです。また、ルーブリックによってあらかじめ評価の観点を共有しているため、相互評価に戸惑いを感じる学生であっても、声の大きさなどの表面的な部分だけでなく、内容についても踏み込んだコメントを発表者に返せるようになります。自分たちの発表に対して50人以上の学生一人ひとりからフィードバックをもらうので、中には厳しいコメントもあるかもしれませんが、学生の反応は非常にポジティブです。それは、発表する側もコメントする側も共通した認識をもって主体的に授業に参加し、相互に高め合っているという充実感があるためだと思います。

インタビューまとめ:小野田亮介(学術調査員)

## ~「Masterシリーズ」とあわせて、ルーブリックをご活用ください~

ルーブリックとは、レポートやプレゼンテーションなどのパフォーマンスの質を評価するために用いられる評価基準を指します。指導に用いることで、学生は「何を改善すればレベルアップできるか」を具体的な行為として把握することができ、教員は明確な基準でパフォーマンスを評価することが可能になります。また、ルーブリックを学生に提示することにより、レポートや発表の相互評価を行うなど、授業方法の幅も広がることが期待されます。

当センターでは、レポート作成の指導に用いる「論証型レポート・ルーブリック」と、プレゼンテーションの指導に用いる「プレゼンテーション・ルーブリック」を2015年度に開発しました。ルーブリックの内容は、Master of WritingとMaster of Presentationに対応しており、冊子とあわせて授業で利用できるようになっています。専任教職員・兼任講師の皆様が本学の授業において使用される場合に提供しておりますので、ぜひご活用ください。

### ▼論証型レポート・ルーブリック



### ▼プレゼンテーション・ルーブリック



申込先(大学教育開発・支援センター)

[cdshe@rikkyo.ac.jp](mailto:cdshe@rikkyo.ac.jp)

メールの本文に以下の4点を記載してください。

- 1) 使用されるルーブリックの種類(「論証型レポート」または「プレゼンテーション」)、
- 2) 使用する本学の授業科目名、3) 履修者(学部・年次)、4) 提供する形態(出力紙または電子ファイル)

## 刊行物のご案内

### 『TA・SAハンドブック 2017』(4月発行)

本学におけるTA・SAの業務内容や業務上の留意点をまとめた冊子です。2017年度版では、学生からの質問が多かった事項について、「業務に関わるQ&A」の項目を追加しました。TA・SAの学生と効果的にコミュニケーションを取る上で有効な内容となっておりますので、ご活用ください。

<http://s.rikkyo.ac.jp/tasaseido> ※要V-CampusID・パスワード



# 紫縁談義

## 経済学部で取り入れた 反転授業の取り組み

—短期海外プログラムの効果的教育実践—

経済学部では、2015年度から開講された短期海外プログラムShort-term Study Abroad Program in Economics(SSA)に、ICTを活用して反転授業を取り入れることで、経済学の知識並びに英語力を向上させる試みを始めた。

この授業の目標は、①事前に自宅などで(英語による)経済学を動画学習することで反転授業に対する意識づけをする。②授業ではグループワーク(議論)と発表を通じて、学生自らが経済学の理解度を確認するというものである。

授業では、先ず次週の授業箇所を提示し、受講生はそれをPC、スマートフォンなどで学習してくる。動画サイトは英語による経済学の授業なので、受講生は繰り返し閲覧することができる。授業では、まず経済学のテクニカルタームの試験を行う(10分)。その後、グループワークにより、自らの理解度をチェックする(15分)。グループワーク後は各グループの代表が板書・発表する(30分)。その後、演習問題(QUIZ)をやり最終確認を行う(20分)。最後は講義のまとめを教師が行い、次週の予習内容を確認し、授業を終える。これを毎週繰り返すことで受講生は経済学の知識を深め、語学力も向上する。

この授業の学習効果については、アンケートをとって確認した。「事前学習ビデオ(ICT)とアクティブラーニングを組み合わせた反転授業によって海外研修への意欲が高まったと思うか」という設問について「強く思う」10人(48%)、「そう思う」11人(52%)と回答者全員が反転授業の効果を実感している。以上のアンケート結果からも分かるように、反転授業の効果はかなり大きいと考える。反転授業は教師の負担が増える気がするが、実際には学生の学習時間の方が増え、学習効果も高い。教師に求められるのは、授業の工夫の仕方である。いかに学生に自宅外学習をやらせるのか、またそれをどのようにチェックするのか、また、反転授業に相応しいテキスト・教材、クラスサイズ(50人以下が適正規模であると考える)を準備できるかがポイントになる。

このポイントがクリアできるなら、多くの授業で反転授業を取り入れることができ、今以上に学習効果を高めることができると考える。

経済学部教授  
郭 洋春(カク・ヤンチュン)

